様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 １９ 日現在

機関番号：１７７０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１４０５５

研究課題名（和文）「新しい哲学教育」の導入による小学校カリキュラム改革の事例研究

研究課題名（英文）Transformation of Curriculum of Elementally School by New Philosophy Education

研究代表者
福井　駿（Fukui, Suguru）

鹿児島大学・法文教育学域教育学系・講師

研究者番号：４０７５８６８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では事例として，お茶の水女子大学附属小学校における学校設定教科「てつがく」の導入，を取り上げた。この事例について，文献・文書の収集，インタビュー調査，観察の複合的なデータ収集と分析を行い，そこで起こっていることを記述，解釈した。結果として「てつがく」の導入は，考えることそのものを学習する領域設定に重要な意図があり，一定の有機的な変化を起こすための条件整備の一つ(それぞれの条件は連動している)であり，教師の教科への内省を促がすことに特徴を持つ，ということが解明された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「新しい哲学教育」の導入は“答えの簡単に出そうにない問題に問いを立て，自分なりの答えを探すことに取り組む”という行為を子どもたちに実践させることであり，学校で学習者の思考力を育成する重要なきっかけになるかもしれない。その際に重要になるのは，それがカリキュラムの他の部分とどのように関連するかである。本研究では，カリキュラムは有機的な全体であることを踏まえ，「新しい哲学教育」の導入と小学校カリキュラム全体との関係づけについて一定程度の理論化を見据えた検討がなされ，どのような関係づけがあり得るかが示唆された。それによって改革提案としての価値を吟味することに貢献したと言えよう。

研究成果の概要（英文）：As a case, this study takes up the introduction of a school setting subject “てつがく(tetsugaku)(that means Philosophy)” of the Elementary School attached to Ochanomizu University. For this case, a combined data collection and analysis of literature and documents, interview research, and class observation was conducted to describe and interpret what was happening there. As a result, it was clarified that the introduction of “てつがく” (①) has an important intention in setting up the domain for learning thinking itself, (②) is one of the conditions for making certain organic changes (each condition is interlocking), and (③) is characterized by encouraging teachers' introspection into the subject.

研究分野：教科教育学

キーワード：新しい哲学教育　小学校カリキュラム　問いを立てる　哲学する　子どものための哲学　対話教育　学校設定教科　教科観の内省

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

学校カリキュラム改革に対する提案の一つに「新しい哲学教育」の導入がある。「新しい哲学教育」とは，従来の誰かの哲学した結果を学習者が理解する教育ではなく，“学習者自身が哲学する”教育である。現在，学校教育は大きな変化の最中にあり，これからの学校教育は学習者が自ら考え知識を創造することを目指している。その中で「新しい哲学教育」を学校カリキュラム，特に小学校カリキュラムに組み込み，この要請に答えようとする試みが起こっている。

「新しい哲学教育」は，答えの簡単に出そうにない問題に問いを立て自分なりの答えを探すことに取り組むという行為を実践させることに特徴があり，学習者の思考力を育成する重要なきっかけになるかもしれない。しかし，学校の一部に学習者が自ら思考する学習を導入したとしても，それがカリキュラムの他の部分と関連しないならば，結局のところ，大部分の学習は決められた知識を獲得する従来のものと変わりなくなってしまう。実際に「新しい哲学教育」が“本来の”カリキュラムとは独立した特別な活動という扱いに終わっていることも多い。カリキュラムは有機的な全体であることを踏まえ，「新しい哲学教育」の導入と小学校カリキュラム全体との関係づけについて，一定程度の理論化を見据えた検討がなされる必要がある。それによって改革提案としての価値を吟味することができるようになる。

２．研究の目的

本研究は，「新しい哲学教育」の導入によって小学校カリキュラムを学習者の自ら考える力を育成するものへと変える理論を構築することを見据えて，小学校カリキュラムの中に「新しい哲学教育」が組み込まれる場合，他の教科実践を始めとするカリキュラム全体とどのような関係を持ち得るのかを解明することを目的とする。

３．研究の方法

本研究は事例研究である。その事例として，2015 年から始まったお茶の水女子大学附属小学校(以下お茶小と示す)における学校設定教科「てつがく」の導入，を取り上げた。この事例について，文献・文書の収集，インタビュー調査，観察等の複合的なデータ収集と分析によって，「てつがく」の導入と学校カリキュラムの関連を解釈することを目指した。大きく分けると，以下の 3 つの方法を取った。また，これらは，連携協力者であるお茶の水女子大学：岡田了祐氏と共同で進めた。

(1) 意図されたカリキュラムのレベルで「てつがく」はどのような構造を持っていて，どのような意義をもつと考えられるのか，理論的に明らかにする。

(2) 「てつがく」の導入は長期的なスパンの中でどのように生まれてきたのかという視点で分析し，学校カリキュラム・マネジメントの一部としての意味を明らかにしていく。

(3) カリキュラムの具体的なコーディネーターである教師たちが「てつがく」をどのように受け止めたのか，教師へのインタビューによって，明らかにしていくことである。

４．研究成果

(1)　第 1 の方法として，お茶小が「てつがく」のことを説明している文書を収集する一方で，授業観察によって得られたデータも帰納的に整理し，それらを突き合わせながら教科の構造・特質を説明した。この成果は，日本教科教育学会編の『教科とその本質』第 4 章第 2 節「「てつがく」とはどのような教科か」として公表した。(以下の部分は，岡田,福井(2020a)の一部を加除筆・修正したものである。)

実際の「てつがく」の学習では，それぞれの子どもたちの経験が学習の中身を作り，その一つ一つの意味もそこで初めて確定される。そう考えると，目標-内容-方法（-評価）のバランスは実際には揺れ動くし，その枠組で捉えることに意味が薄いと考えることもできる。しかし，あえて“教科”として捉えた時に「てつがく」の意味が見えてくる部分もあった。

「てつがく」は現代社会の市民育成を意識し，その基礎としての「考え続ける」ための習慣を涵養することをねらいとする。「てつがく」は，既存の教科のように知識を教育内容として設定せず，問いの扱いを中心とした「考え続ける」個人と集団の在り方を学ぶ内容にしている。「てつがく」は，他者と一緒に概念を改めて使用してみること，子どもたち自身で問いを投げかけ合うことをその方法として設定している。

「てつがく」は，探究を生み出す原動力である「問い」を知識の習得の手段ではなく学習の目的とする領域を作り出すことにより，探究の結果からその過程へと学習の重点を移行させる試みである。考えることそのものを学習とする目標-内容-方法を追求する教科「てつがく」の設定により，主体的に考え，探究しようとする試みの足掛かりを作り，そして，その意義や必要性を子どもたちと教師が再確認する場を作り出すことが企図されていた。

(2)　第 2 の方法として，お茶小が毎年行っている授業研究公開の資料を 2000 年前後のものから最新のものまで約 20 年分を収集したのに加えて，その間の学校としての試みに深く関わってきた教師数名にインタビューを行った。それらのデータから，「てつがく」導入を含むカリキュラム・マネジメントの多層的な段階性を検討した。この成果は，「近年のお茶の水女子大学附属小学校における学校カリキュラムの展開-継続的なカリキュラム・マネジメントに着目して-」と

して公表した。(以下の部分は，岡田,福井(2020b)を加除筆・修正したものである。)
　お茶小では，2001 年の同系列幼稚園との連携研究から一貫して「他者との協働」を目指していたことが見えてきた。「他者との協働」とは，換言すれば，他者とともに社会をつくっていく力であり，お茶小がカリキュラムをマネジメントする上で目的となる市民像であると言える。「他学校園との連携期」においては，このカリキュラムを貫く目的の再整理,「シティズンシップ教育期」 は，目的を全体へ適応する汎用的な教授-学習概念づくり,「てつがく導入期」は，この目的達成のための基礎を育てる時間と空間を別に用意する領域の確保，というような段階的な意味を見出すことができた。
　翻って言えば,「てつがく」導入は，カリキュラム全体の目的の整理や，カリキュラム全体に適応可能な教授-学習概念と連動する形で，目的達成のためのカリキュラムの条件整備として働いていた。

(3)　第３の方法として，お茶小のほぼ全教科の教員に「思考」や「探究」の意味をどのように捉えているか，それは「てつがく」や自分の担当する教科(お茶小は教科担任制である)とそれぞれどのように関連しているか，についてインタビューをし，それをグラウンデッド・セオリーアプローチによって，コード化・ストーリー化した。この成果は，日本教育方法学会第 55 回研究大会にて,「お茶の水女子大学附属小学校の学校設定教科 「てつがく」はどのように実践されているのか -カリキュラムにおける役割に注目して-」と題して報告しており，今後論文化する予定である。
　生成されたカテゴリーは,【教科としての新規性】,【教師の学習のあり方に関する葛藤】,【子どもの学習のあり方に関する戸惑い】,【教師の学習に関する考え方の変化】,【子どもの学習の変化】,【専門の教科と「てつがく」の共通性】,【既存の教科のあり方の問い直し】であった。これらの関連性は,「てつがく」の導入，すなわち子どもと一緒に哲学する授業を継続的に実践していくことで，教師たちの学習に対する考え方が少なからず変化し，それによって各々の教師の担当している教科にも影響し始めていることを示していた。
　「てつがく」では，子どもが問いを考えることとなり，子どもの探究したい問いと教師の探究したい問いは必ずしも，常には，一致しないことを教師はより深く理解する。「てつがく」の導入は，教師に対して，これまで考えていた教授-学習のあり方に葛藤を与える機能があった。そして，初めは従来の学習との違いに違和感をもつ子どもたちが自然にそのような学習を受けいれることを発見する。どんな主題にもそれが出てくる過程，動機，背景に新しい考えを発見できることを楽しむようになっていく子どもを発見することを通して，教師は子どもの発言の背景を考えることをより重視したり，自覚化するようになっていった。このような「てつがく」の影響が日々の実践に浸透し始めると，緩やかに既存の教科のあり方の問い直しが行われる。各教科の考えるという行為には一定のモデルとなる探究の形がある。その性質を決める問いの立て方にまつわる実践の変質は，教師に教科の在り方についての省察を生み出し得ることが明らかになった。

<参照文献>
岡田了祐，福井駿(2020a)「「てつがく」とはどのような教科か」日本教科教育学会(編)『教科とその本質-各教科は何を目指し，どのように構成するのか-』教育出，pp.164-169
岡田了祐，福井駿(2020b)「近年のお茶の水女子大学附属小学校における学校カリキュラムの展開-継続的なカリキュラム・マネジメントに着目して-」，お茶の水女子大学人間発達研究会『人間発達研究』第 34 号，pp.39-63

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 岡田了祐，福井駿	４．巻 34
２．論文標題 近年のお茶の水女子大学附属小学校における学校カリキュラムの展開-継続的なカリキュラム・マネジメントに着目して-	５．発行年 2020年
３．雑誌名 人間発達研究	６．最初と最後の頁 39-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 岡田了祐，福井駿
２．発表標題 自己コントロール社会における主体的市民の育成 -お茶の水女子大学附属小学校におけるシティズンシップ教育の試みを事例に-
３．学会等名 全国社会科教育学会 第67回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Amber Strong Makaiau, Fukui Suguru, Noboru Tanaka
２．発表標題 Working with International Partners to Build a Deliberative Democracy Through Social Studies Education: Examples from a Collaborative Research Exchange Between Japanese and U.S. Colleagues
３．学会等名 29th Annual Japan-US Teacher Education Consortium Conference　（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 福井駿
２．発表標題 アメリカの哲学教育が日本に示唆すること-Philosophy for Childrenアプローチを中心に-
３．学会等名 日本カリキュラム学会 第30回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 岡田了祐，福井駿
２．発表標題 お茶の水女子大学附属小学校の学校設定教科 「てつがく」はどのように実践されているのか -カリキュラムにおける役割に注目して-
３．学会等名 日本教育方法学会大会 第55回大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 日本教科教育学会(編)(第4章第2節執筆：岡田了祐，福井駿)	４．発行年 2020年
２．出版社 教育出版	５．総ページ数 191
３．書名 『教科とその本質-各教科は何を目指し，どのように構成するのか-』(第4章第2節：「てつがく」とはどのような教科か)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
連携研究者	岡田　了祐 (Okada Ryousuke) (80757287)	お茶の水女子大学・教学 IR・教育開発・学修支援センター・講師 (12611)	